



明治四十五年三月

校友會雜誌

會後本

滋賀縣立彦根中學校校友會

號五拾第 卷貳第

校友會雜誌第二卷第十六號目次

●講	演	海軍中將 肝付男爵講話
		文學博士 姉崎正治氏講話
		文學士 中村勝麿氏講話
○論	說	
●偶	感	第四年級 中山貞武
●滅	亡	第三年級 熊谷讓
○文	苑	
●芳野紀行		第四年級 脇坂越溪
●此の一戦を讀む		第四年級 久野元治郎
○練兵見學		
●見學記事		第五年級 理事 事
○通信		
●東京通信		校友 菊澤季麿

●あゝ苦い經驗
校友 富永 晃
●故宇野敏正君の死を悼む
校友 高橋貞太郎
●水の御別れ
全 人

○雜報
○部報

校友會雜誌 第二卷 第十五號



○肝付中將講話

只今校長から御話の通り計らずも諸君に向つて私が海帝國に對して抱ける希望を述ぶる事をうるは光榮とし且つ愉快とする所であります

諸君は現今中學の教育をうけてかられ、やがては社界の中流以上に立つべき人である。然して將來に於て滋賀縣を代表せらるゝ方であるから一層の抱負を切に述べたいのである。さて我國は世界にたぐいまれなる國である、何がたぐひまれなるか。これ帝國の四面環海なる事でありませす。これを外にもとめするには英國より他に例がないのであります。英國は實に世界の第一流中の第一等のものである。然し我國民として奮發さへすれば彼のやる事が出来ぬといふ事はない、我國を世界に雄飛せしめんにはどうしても海を土臺とせねばならぬ。英國にては「ロードベーンコン」といふ人がこう云ふ事を言ふてをる「世界の海を制するものは世界の商業を制し、世界の商業を制するものは世界の財貨之れに伴ふ」と。誠にもつともな事であつて歴史上に

見るもかの「カルタゴ」「ギリキ」の如き、又下りては「ポルトガル」の如き海を以て勢力を得たるものは皆榮えております。現今に於て英國は世界の雄であるが、世界の総噸數五百萬噸の中英國は百八十萬噸を占めてゐる。即ちかくの如く海上の制權を得る上は地球上に雄飛する事はどの難事でないのであります。又世界の商業も其三割以上は英の手にあります、世界の富といへば米國と英國とをさすが「ペーコン」の説のよくあつてゐるのを見るのである。

爾つて我が國はどうか。そもく中流以上に立つて我國を脊負つてたつものは時代の智識を得る事が必要である。

我國は「ペルリ」來朝以來五十年其間いかに變つてきたであらうか。私はこれを三期に分つ事が出来ると思ふ。第一期(嘉永元年—明治四年)は混沌時代で日本はまた小さくわづかに藩内の事を知ればたりたのであつた。然るに第二期(明治四年—日清戦争)にいたり漸く日本の日本となり或は法典の編制憲法の制定條約改正等我が國の準備内政の時代であつた。併當時の世界の人はいかに日本を見ておつたか。一例をあげんに日清戦争の時英の「コロム」と云ふ知識ある海軍中將は或る人に答へて「支那は鯨で日本は鰐の如きものである」と然るに結果は我の大勝利に歸した。英のかゝる大學者の軍人すらこの通りであるから當時の他の人々の考はなをさらの事である。暫くして後北清事變起り日本の勇敢なる事は英國をおどろかす事益々大であつて遂に同盟を結ばしむるに至つた。次に來たつたのは日露戦役であります。我國は開國以來大國難と云ふものが二回ある。一回はかの元寇であつて其時は時宗の力と伊勢の神風とによつて敵兵十萬海のもくすど消ゆ生き残りしはわづかに三人と云ふ有様で幸に事なきを得ました。

次は日露の役私は之を元寇以上の大國難であつたと信じます。誠に有史以來の大戦争でござりましてもし負けましたならば如何で有ませう。か然るにかの奉天の戦に於て又日本海の大海戦においても共に未曾有の大勝利を得まして我國の勝利となつたのであります。こゝに於てか世界は彌驚き英國の如きも一歩進みて我れと攻守同盟を結ぶに至つた。英國は東洋に於て日本を信頼して大なる幸福を得たのである。世界も又日本を一等國として大使を交換する様になつた。

大使はなか／＼出さぬものであるが之は世界が日本を一等國とみなしたる證據であつて即ちいよく世界の日本となつたのであります。今は之れ大いに雄飛すべき時である。商賣であらうか何であらうか、世界を相手にしてかゝらねばならぬ、世界の大勢を察してかゝらねばならぬのである。又我が國が一等國となり大なる名譽を博したると同時に大なる責任使命を増したと云ふ事を知らねばならぬ。

そもく現今の世界は一等國の世界である。二等國、三等國などは實に何等の權利もありません。よく萬國會談だと云ふが實は一等國のみで定めてしまふのである。ソシテ一等とか二等とか三等とか云のは腕力で定められるので實に腕力之れ權力である。

さて日本は内治の時代より外交の時代となりましたが此時に當り日本は如何に活動すべきか。貳千有餘年の歴史を有する全歐無缺の國体を保持して行かねばなりません。世界は表面は和親と云つてゐるが實はにらみ合である。現今日本に必要なものは武力であります。今日は昔の如く國王對國王の戦争ではなくて國民對國民

民即國力對國力の戦争である。獨逸は今では一番すゝんでゐる國であるが其國の一將校は武力なるものに定義を下して「國家が戦争に利用しうべき一切の資力の總計なり」と云つてゐます。次に軍とは武力の整頓したる國力なりと云つてゐる。今後は國民一致の後援がなければ決して軍の實力と云ふものはありません。日露戦争は好適例でありまして日本の勝つたのはよく此の理にはまつてゐたからである。之に反して露國の敗れたのは國民が一致しなかつたためである。之によつて見れば今後日本の爲に必要なものは武力の完備、即武力の整頓と云ふ事であつて、之帝國を益々發展せしめて行く道であります。武力には直接（陸海軍）と間接（陸海軍以外）の別がある。先づ直接武力即陸海軍の方から御話致しませう。

今日一等國の陸軍は總計五百萬ばかり、戦時に於ては無數であります。どこでも豫備、後備の兵數が秘密であつてかの「クロマトキン」の如きさへ日本の兵數を三十萬ばかりと思つておつたが、一度開戦となるや我れは百萬の兵と滿韓の野に出したのであります。平時に於て最も多いのは露の百十萬であつて我れは二十五萬約露國の四分の一にあたる。海軍は英の百八十萬噸が最大で我れは五十萬噸之れ又四分の一強にあたります。實地の強弱は判断が出来ませんが數字上の計算は上の如くになります。第二には國の富を表すところの貿易を見るに世界の全額四百五十七億圓、英は最大であつて百七十二億圓、我が國は僅に九億圓、英の1/19にしか當りません。之れでは陸海軍の四分の一に對して平均をとる事が出来ませぬ。早々四五十億圓の貿易額に致したいものであります。かく富力に於てかくるところがあつては決して武力の整頓は、かられませぬ。英國は「トヲファアルガル」の海戦に二十二億の金を要しましたが、みな之を自國で辨じました。我國も二

十億圓の借金をみなかくしたいものであります。世間では武力に注意する人は多いが富力に至つては其れ程にない。一体武と富は夫婦の様なもので我國の如きは丁度常陸山に赤兒がいつしよになつた様なものである。然らば富を増すには如何にすべきか。他なし「海力を制するものは世界の財貨を制す」と宜しく「アングロサクソン」に學ぶべきであります。近くパナマの運河は開通せんとす。どうしてばかんとして居られませうか。さて海上權力の要素には六つあります。一地位、二地形、三領城の廣さ、四人口、五國民的品性、六政体である。この六要素の最もよくそろつてゐるのは英國であると云はれてゐます。併し私は我國は英以上であると信じます。すべてものは精神的要素と物質的要素が相調和して初めて偉大なる働きをなすのである。他の種々の條件に於ては世にまれなるものであるが惜いかな日本は精神的要素に於てかくるところがありはしむるか。私は國民的品性に於て海事思想に欠乏してゐるところがあると信するのである、あの國是のしばしは、かほるのは喜ぶべき事ではありません。英國が海上に權力を得んとするはエルザベツタ以來の大國是でありまして決して變る事はない。一時「クロムウェル」の如き偉大なる人物が出て政体の上から見れば非常なる變動があつたにかゝわらず、其海上政策は少しも變らなかつた。又議會に於ても海軍の豫算を一度も減じた事はありません。コレ英國の今日盛なるを致した所以でありますまいか。將來は諸君の中から議員となる方も出て我が海上政策の發展する事も必然であらう。とにかく目下の急務は富力を増進する事及海上政策をとる事要するに海を土むるにする事である。次に人口の事を話しませう。

人口の最も大なるは露國で一億二千萬。次米の九千二百萬。獨逸の六千三百萬。日本の六千萬次でオースト

リア、ホンガリー、英、佛、伊の順であります。次に稠密の處は英が一番で一方里に二千人、第二が日本で一千八百人、次で伊の一千七百人、獨の一六五〇人の順である。

露の如きはわづかに八九人の割合であつて兵をあつめても中々よらぬのである。我國はかくの如く人口に於てはよい方である。内地だけ調査によるに増加の割合は五年間に十萬につき千三百の割である。然して五十餘年後には今の二倍となり八十年後には今日の三倍となる勘定である。

百七十年後には十倍となる。かくの如き勢で人口はふゆる。併し土地は今後さはどふゆない。昔は空地が多かつたが今は空地もありません。國民の口を養ふものは米であるが其の米が一昨年の大豊年に於てすら二百萬圓の南京米が輸入された様な次第で、我貿易に於てわづかに之をさへてゐるものは生糸のみである。陸に於ける状態はかくの如くでありますから私はこの増加する人間のはけ口を海にもとめるのが最もよい法であらうと考へます。海には税金はいらない。この廣大なる海をのぞんで出かけ或は他の殖民地に侵入するもよろしい。しからざれば日本の將來は誠にあやういのであります。

さて英國に於る農、工、商の分配如何と見まするに百分比例にて農、一五、五、工、六九、五、商、一五である我國は二十一年の農商務省の調査にて

農、七五、工、七、商、十四

當時に於ける英國は

農、一九、工、六八、商、十四

農業はやらねばなりません。諸君の中にも長男はさておき次男三男の方は「アン・グロサクソン人」に學んで大いに商工業の方面に發展していただきたい。よく「ヒヤメシ」等とて冷遇されますが刺撃になつて次男以下の方には大なる事業をなした人が多いと云ふ事である。これ等の方は海に於て其發展の地を求めていたゞたいのであります（十分間休憩）

次に國民的品性の缺點について、少しく御話をいたしました。先づ何事をするにも最も大切なるものは、元氣であります。オースタリーの「スタイン」といふ人は「國の強弱は、第一に國民の元氣と、第二に人口の粗密による。」といつてをる。私は我が國民が一般に、勞働思想に欠けてゐると思ひます。これは、士農工商の階級制度の餘弊である。

「花は櫻木、人は武士」と云ひ、又は「敷島の和心を人とは、朝日に匂ふ山櫻花」とかいつて武士は尊いものである。名譽なものであるが、この習慣がやがて勞働をいやしむ様になつたのであります。かのギリシヤの哲人ソクラテスも、「勞働は神聖なり」といつております。英富めり、米富めりといふも、之れいづれも、勞働を重んじたからである。米國は五十年ばかりの間に、千八百億の富を得ました。實に財は勞働の結果であります。先年米國セントルイス博覽會の時、學藝會が開かれまして、世界から、百二十六人の學者が集りました。この時我が國からも菊地箕作穂積の三博士が、列席されましたが、先づ向ふにいつて、第一等の旅館にとまられた。すると、毎朝新聞をうつてゐる、小ぎれいな子供がある。或る朝、ホテルの主人をつかまへて「ファアザアとよんだので、おかしな事と思つて尋ねると、これはこのホテルの子供であつて、米國にては勞

勤神聖を知らしむるがために、どんな富豪の子供でも、かく新聞賣子となつたり、或は牛乳配達をやるなどの事であつた。かう云ふ様子であるから、アメリカ人は、なにをやつてもつぶしはないのであります。又博覧會にいつて見ると、老人のために椅子車を作って、これをおして行く人がある。どういふ人かと聞いて見ると、いづれも大學生であつて、大學生でなければ、許さないさうである。向ふの大學生はかく車夫兼案内者の様な事を平氣でやつて、勉強してゐるのである。又南部へまいりますと、秋の收穫時に、大學生をやとふ處もありません。これ米國民の富強の民である所以であつて、彼等は決して、弱い人種ではないのであります。我國民も勤神聖の精神に、富んでもらいたいものである。第二には、社交であります。日本人はどうも社交心に乏しく、大なる交際に拙い。これは我國が鎖國主義をとつてゐた、結果であります。然し今後は、四海兄弟の交をなすべき時であるから、大いに社交心をまさせねばならぬ。殊にパナマ運河開通後は、世界の人が入込んでくるのであるから、尙更必要である。で私はこの準備として外國語の練習を、諸君におすすめ致します。「口は禍の門」といつたのは昔の事で、文明の今日にあつては、大いにしやべらねばならぬ、あまり聞き通しでもこまるが必要ある時には、聞く口をもたねばなりません。故に大いに社交心を養ひ、二三の外國語に通ずる事は、目下の急務であつて、又大國民たるの一資格であります。第三に吾々は共同一致の性質に乏しい、これも封建政治の結果である。今後は小なる働を許さないで、大なる働を要するのであるから、共同一致といふ事は益々必要であるこの同共心は、服従からくるので、軍隊の如きは其のいちぢるしい例である。服従といふ事は、決して獨立を失ふものではありません。豊太閤は服従心にとんであつた。そして自分がよ

く服従といふことを知つてゐたから、よく人を服従させることが出来たのである。一体ものは、人がみて半分はよいといひ、半分は悪いといふものが、多くは大なる事業をなすものであつて、十人が見て、十人もよいと見るものは、必ずしも大なる事業をなすものでありませぬ。兎に角服従心にとみ、雅量にとんでおれば、共同といふ事はゆるるのであります。第四には約束を重んずる事。とかく金をかりても、期日に返す人は少く、二時の集會を三時に行くとかいふ實例は、澤山あります。こんな事は内國人に對してはすむかしらんが外國人に對しては、誠にはづかしひ次第ではありませんか。約束を重んずる人には、時計は全く不用であります。英國の領事が「支那人の一言は日本人の證文よりまさる」といつた事があるが、この點に於ては日本人は支那人よりかどつてゐます。信用は商業上にも何にも極めて大切なるものであるが、それは約束より生ずるのであるから、約束をよく守つてもらひたい。

今後の大國民たるものは、寡慾は禁物であります。個人としては、いかに清貧は貴いものであつても、國民全体がこの通りでは困ります。一体日本人は、大なる慾に乏しいかと思ふ。支那の言葉に「國を盗むものは帝王となり、財を盗むものは捕れとなる」と云ふ事があるが、希望はかくの如く遠大でなければならぬ。慾望はかくの如く大きくもたねばならぬ。すべての事に慾望の小さいのは、成功も小さいのであります。次に貯蓄といふ事に於ては、本縣は非常に富んでゐると承はつてあります。しかしながら、元來貯蓄といふ事は大いにためて、大いにつかはんが爲であるから、本縣下の如く、ためる事はよくためるが、これをよく用ひぬと云ふ事は喜ぶべき事ではない、大いに貯へ、大いに散じなければ、國民として大なる働の出来るもので

はありませぬ。統計によると我が國の貯金高は、二億圓にのぼつてゐますが、他の國から見ればまだ少くないものであります。次には徳義といふ事。

世界の人を相手にするには、この徳義といふ事が非常に大切である。我が國は公園にゆくと「この枝折り取るべからず」等とかいてあるが、これは徳義のない證據であります。私の一人の友人が、先年笠置艦にのつて米國に行き、英國にまはつて歸つてきました。其の人の土産話に「あちらで非常に感じた事は、フヒアデルフヒアの電車である。向ふの電車には、車掌としてはからず、賃金は均一にて一つの箱があつて、それに各自が金を投入するのである」と之れはどうも感心ではありませんか。日本でも萬國を相手にしての舞臺に立たうとするには、早くこの様になりたものである。我が國で、電車に車掌がなかつたらどうでしょう。薩摩守ばかりではたして營業になるかとさかされると、返答に困るのであります。これ等はすべて公徳心の缺乏からさす。我國にはこの公徳心の多少をあらはす、育兒院盲啞學校等は大變に少ない。早く國內における慈善的事業が完備したならば、我が國は戰には強し慈善には強しとて、はじめて世界の一等國たりうるのであります。

私は國民的品性の缺點として、之等をあげてきました。缺點はまだ多くありませう。しかし要するに今後日本人は敏でなければならぬ。敏たらんとするにはコンモンセンスが必要であります。先達石本陸軍次官が宮中に参内した時「皇太子殿下の御歸りの時刻を尋ねたところ、午前三時だと答へたが、今の宮内省の役人は常識がないから困る」と私に語りましたが、今後常識を養ふこと、しかも博愛心を伴ふ常識を養ふ事が必要であります。次には實行であります。昔から不言實行とかいひまして、口ではいへども中々に實行といふ事はむづかしいものであります。之を要するに腕力智力金力の三ツをそなへなければ大なる活動をする事は出きません。小なる例であります。あの顔役なるものは、よくこれを證してゐるのであります。即國と國との競争に於ても、その通りであります。管仲の言に「衣食たりて禮節を知る」とありますが、私はよくこれを服膺してゐる一人で、どうしても勢力や、力がなければ、禮節の様なものを云ふ事は出きないと思つております。こゝに於てか、勤儉といふ事が必要となります。しかしあまりにみ過てもいかにぬから、多少の冒険といふ事が手傳はなくてはなりません。即敏ならんには、常識、實行、勤儉、冒険の四つが伴はねばなりません。今その適當なる割合を申すれば。

常識三　實行三　勤儉二　冒險二

であらうかと思ひます。ナショナルキヤラクターの欠點、まだくゞざりませんが、又御話しいたす折もありませらうから、これで止めておきます。最後に諸君の世にたつて、大いに活動せられん事を望む。



文學博士 姉崎正治氏談

井伊大老の股肱として辣腕を振ひし長野主膳に就て講演の爲め來彦本校にも來臨一擧の訓話をせらる、博士の雄辯は既に定評あり、今其の聲談に接す、且らく之を録して本誌に載す。文責在筆記者（中野石腸生）

本日は中村様と同行して當地へ参りました爲め諸君と此處で見へて御話をすることの出来る機會を得たので、回顧すれば、そう、早いもので最う廿年計り前に、ゲートルを着け鐵砲を擔ひて彦根地方へ行軍に來た事があります、あの南の方の山の具合を眺めますと當時の事が憶はれて諸君等の時代の事を想倒せずには居られません。今日は私も諸君等の少年時代にかへつて再び彦根の地を踏んだ様に懐しさの感に堪へんのです。それで只今諸君の御朋友として且らく御話をいたします。諸君は將來國家有用の材とならんと欲して學問を勵み人格を陶冶せんが爲めに修養を積まるところであります、私は諸君よりは經驗を積んであるから色々の困難にも打當つた、亦様々の喜びにも遭つた、世の人の心は宛も五百羅漢の顔の千差萬別である如く氣に入ること癩に障ること、利己主義一偏の人、人の爲め世を救ふ爲めに粉骨細身する人、善人もあれば悪人もある諸君は社會に一步踏出したが最期此等の困難に打當かり十人十色を操るだけの確固たる精神が須要である。これは社會のみではなく學術を研究するにも其行手には千疊の山も有れば深淵も陥穽もある愉快な事心配な事嬉しい事腫を切して起り立派な結果を得るまでには數知れぬ失敗を経なければならぬ。

然し此の失敗がやがて經驗の母となつて遂には學術界に偉なる貢獻するに至るのである私の知つてゐる獨逸人が支那の植物を採集せんと長い星霜を経て漸く完成に近づいた際火災に罹つて折角他年の苦心を灰にして

しまつた、然し彼はこれにも懲りず四百餘州を跋涉し再度やつと出來上りかけた時二度目の火事で丸焼を食らい尙失望せず三度目の火事の折には既に双鬘霜の如き老翁となつたが依然として撓まず屈しないばかりか天は私の力を試すのだと云つて却つて、喜びの色を漏して居つた、彼のラッシュムの発見者キョーレー夫人の苦心も甚だ慘憺なもので何でもヒツチ、フレンドと云ふ礦物の放射作用があるか否かを試す爲めにレキシヨードか云ふものを溶解し沈澱し、沈澱しては溶解幾十度となく繰返し到々かの大発見をなすに至つた、これには種々の異論もあるが兎角これは學術界の通弊であるが夫人は夫の死亡後其の遺志を繼ぎ孤獨を守つて怠らず研究に餘念なき有様である。複雑な社會には自分の失敗に同情するものもある、怪事を附ける奴もある人情の反覆常ならず衷でない、さて人間といふものは人間として生存し互に共同、協力し合つて以て今日の様な社會を形造つたのである、善隣某國の如きは兄弟相闘いでどんどど埒が明かないのみか自分の國の運命は風前燈もたいならざる有様である。纏つて我國は如何うか。我國には金歐無缺の立派な大黒柱がある國柱がある此の柱は國內が如何に亂れても大水が出ても暴風が吹き荒んでもいつかなびくとも動ない雨降りて地固るの例へで困難に遭ふ程丈夫になる、立派になる、明治の今日蒼生が鼓腹擊壤して聖代を祝言ぐことの出来るのは、ローマは一日で成つたのではないが如く決して偶然な譯ではない。

さて、支那の人達は人間の性は悪であるとも、いや善であるとも云つて居る、然し頭の先より足の爪まで徹頭徹尾悪ではない、如何なる極悪無道の者でも、さあ死刑の宣告を受けたならば生れ變つた様に善良になり前非を悔ひ、惡を働く時は前後の思慮もなく遂行し、借彼になつて開悔し今の今迄警察の目を脱れて野に伏

し山に隠れて居つた者が往々自首して出ることがある。

我々は決して泥棒はせないと云ふ、せない心算であるのが、信心の中では立派な泥棒をして居る物を縦ひと云ふ之は既に心の中で泥棒の卵が生れ出たのである、人が善行をする之を嫉妬する、之が成長して遂には人を陥れ甚しさに至つては殺害を敢てする様になるのである、我々の心には悪い卵が澤山あると同時に善の卵も多分に孵化されて居る赤子が井戸に陥らうとして居るのを誰が過眼視する事が出来やう子供が車に敷かれ様とするのを誰が傍観する事が出来やう直に救助に趨くであらう、之内心の善が形を爲して現れたので即ち仁の端である。此の善此の仁で悪念を退け敵伏せ飽迄悪と戦ひ終さねばならぬ、突のけ飛び越へ制壓して進んで善を取らねばならぬ。

儒教では仁義の二字を並べ稱して居る、此仁は即ち柔義は即ち剛で惡を制するのに威力を振ひ武力によるは之剛にして物事を軟かに素直に思ひやりのある之が仁である、親に孝、子を愛し、夫婦相和し、朋友相信する之亦仁である、義を見て爲ざるは勇なきなりと云ふ力と云ひ勇と云ふ總括すれば義である剛なのである、仁と義とは陰と陽とだ、故に我々は仁義並び行ひ適當に使ふ必要がある。之をしかつめらしく曰はすして卑近な例を取れば今此處へ參る前に私が便所へ行つた、諸君も行つて居られた、之は即ち義を行つたのである、小便大便沐浴してグン／＼と垢をこすり取る何に小便だと云つて可笑しい事は無い、運動をすべき時にすると大差ない、出すべき物は當然出さなければ毒だ、有害多毒のものは構はず排除する覺悟が用要である。然し乍らそう出して計居つてはならぬ、空腹を感じたら食物を食ひ咽が渴いたら水を飲む、之は仁である。

而し物を食ふかと云つて鱈よくやつてはいかぬ、滋養品をやるのも好いと云つて贅澤はいけない、要は如何んな者でも適當な限りに於て取つて食ひ、自分の者にするのでなければならぬ、目で見耳で聞き鼻で嗅ぐ外から來るものは皆取入れる諸君等も先生から教はつたものは腦中に受け納める之が仁の徳である。

此の仁と義柔と剛とが相調和して初めて複雑な社會をうまく切り抜け世に超然することも出来るのである、仁と義との御話は且らく之だけにして仁の内の同情と云ふ事に就て御話しやふ。

同情は思ひ遣ることこれが仁の根本である孟子の謂つた如く同情が唯一の心の徳であらう。

思遣りと云へば諸君は「シ、臭い」と云つて殆んど耳を借さぬかも知れぬが是は青年に有勝な謂草で諸君の内には無いだらうが坊様育ち同情の無い人が下女を奴隷視し主人氣になつて我儘を云ふ甚敷に至つては叩いたり蹴つたりする、此様な人は社會廣しと雖も自分一人のものである人多しと雖も我一人賢いものと御山の大将を極め込んで居る、小供の時には之でも通るが生長つて社會へ飛出したとて、社會の人は其様なにハイ／＼と云ふ事を違奉して呉ない至る處で頓挫墜跌し遂には孤立して相手にせず、不愉快千萬な生涯を送らなければならぬ。

思遣りの大きなものは人間の規模が大きいし、同情のないものは、夫だけ人間が小さい、世を拗る、之偉大なる自然の力の然らしむるのである。

西行法師の歌つた

にこるべき岩井の水にあらねどもくまば宿れる月やさはがん

と云ふのは西行が、峻しき山路辿り行き岩井の水を汲み取りて疲れを醫せんとして蔭を宿せる月はさきはせないかと池の面の月にまで深い同情をよせたので此の同情があり之を他に及ばしたならば如何なる悪魔も強賊も服従するのである、馴づくのである、昨日参りました長野主膳にも

我植へし花に嵐のつらからは手ににそふれそ人の梢に

と歌れたのがある自分の愛培して居る梅の花が亦櫻の花が嵐の爲めに吹き散さるゝのが心掛りなれば手にぞふれそ人の木の梢の花にと云ふ意味であつて即ち博愛の心である、同情も無情の花にまで及ぶに至れば最

う其の極に達したものと云ふべきである。

由來我國は武を以て進んでる國である、長くも帝室を中心として不義を以て侵し來る敵は六千萬の同胞が一丸となつて抵抗し抑壓し制限する國民が残らず枕を並べて討死しても構はない七度生れても國賊を滅すのである、之が剛である義である、然し此の剛氣一遍ではいけない思遣り同情がなくてはならない日本は昔から決して剛氣一遍ではない之と並んで柔も優に秀で居る。

楠正成は如何か、義の爲めには死を鴻毛の輕きに置き剛を以て百萬の豺狼を千早の城であやなした、之は武である而し彼は剛のみではなかつた。

河内攝津の兩國は人情が温和であり戦亂時代に構はらず手形交換が行はれた、町人は御互に信用を以て交つた之れ楠公の同情が國民の心情にまで感化を及ぼした結果である、亦戦争の前に觀心寺の法華經を奉つて立願し國家人民の安寧を祈つたこともある。

秀吉は麻の如き天下を平定した剛氣一方の人の様ではあるが一面には優にやさしい愛情があつた、征韓役で名古屋陣中に妻君に送つた手紙等其の掬すべき心情が溢れて居る。

日本の荒くれ僧のあの日蓮彼は實に荒くれ坊主であつた自分の所信を貫徹する爲めには一死を視ること尙歸するが如くであつた、彼は鎌倉で早く元寇の難事のあるのを豫言した此國を助け此民を救ふのは我佛教の力に憑らなければならぬと主張し武威も彼を屈伏せしむる事は出来なかつたのである、之即ち剛である然し其裏面には柔を證するに足る話も多い、弟子に與へた手紙にも思遣りの情趣が躍如して居る、弘安五年美濃工原郡で栗毛の馬に騎り其の馬を返す時に舍人を變へて送り返すからどうか勞はつてやつて呉れと云つた思遣りの禽獸にまで及んだもので「鳥と虫とは泣きも涙なし日蓮は泣かねど涙ひまなし」と此涙が一切衆生を救つたので既に仁である柔である思遣りである、彼は此涙で一切衆生を救済したのである。

何れの窮喬へ行つても南無妙法蓮華經の聲と太鼓の音を耳にせぬ處の無いのは實に故由ありと言はなければならぬ。清正の外に剛にして裏面に春風のそよ吹くやさしみのあつた事は色々の事柄で諸君も定めし御存知のことと思ふ。

我平民性は即ち此の剛にして柔の點にある三種の神器でも劍は剛で向ふ處の敵は草をなぎ拂ふが如く切平けてしまふ亦鏡は柔で寫る處のものを美醜を問はず貴賤を論せず皆抱擁して入れてしまふ是が我國民性であり理想である、是れは日本の最初の傳説で確かにすることが出来る。神代の巻を繕けば天照大神素盞鳴尊の御事がある、この御二方が面白い對稱を爲して居る即ち素盞鳴尊は嵐を起し草木を吹き枯らす様な力強く荒ら

しい神で大神は女性にわたらせらるゝ故弟の尊とは事變らせ仁徳と云ふ光明を放ち躬親ら田をつくり蠶を飼はれ八百八神皆其の徳になびき服した尊が如何にたけく雄々しとは云へ大神の徳の光には頭が擧らないといふ高天原仲ッ國には居られなくなり出雲の國へ追ひやらるゝ様になつた此の様に一方には剛の神其の暴力を抑制するには柔の神が居られて手本を不窮に垂れられたものである即ち日本國民性の根本理想である。かく剛の徳も處を失して義を行へば柔即ち仁の爲めに制服せらるゝのである、歴代の帝王も大に鑑みられ垂神帝の時には四道將軍を各地に派遣せられた四道將軍とは決して武力で四方を制限する方便ではない「民を導くは教化にあり」として皇室の仁徳高大無邊なるをしめしそれでも尙王化に服せないものには是非なく武力をかつたので即ち剛と柔との兩刀を使つて目的を達せられたのである、かく色々の方面でも色々な説明が出来る歸着する處は只同情の二字に外ならないのである。

我々は須らく和樂の天地に大なる王化に浴したいものだと思つて居る、決して武備を弛るゝし門戸をひらけと云ふのではない戦争と雖も即ち可なりと云ふ充分の餘裕があつてさうして戦はずして平和安寧を維持して行くのである此間も日本とアメリカとが早晚戦争をやるに違ないとかましく吹聴されて居るものもあつたがこれはあの軍備擴張を誤解して取つた謬見である軍備の擴張は戦ふと雖も即ち可なりと云ふ力を備へる爲でこれが外國と于戈を動かさない唯一の武器となるのである、無二の良策である。

我々はこの仁徳を世界に輝し大なる感化を萬邦を普く及ぼさなければならぬ儘し剛にして此の仁なくばこの柔なくば其の剛は畢竟野猪的で何等の實力がない仁にして剛であつてこそ剛中の剛たることが出来るのだ。

同情は他方から考へば又信達の美德である、自分一個の我儘勝手はいかぬ之は信達ではない教育の方から云へば先生は先生で互に其の心を汲む生徒は先生のとを思ふ親に對しても信達の誠をつくすのである之即ち同情の變形である。

教育勅語は此のよく信達の徳をしめされたものである、即ち皇祖皇宗を大本として畏くも陛下自ら信達の情を現し給つて居る實に世界に古今に替らざるの大道である朕爾臣民と俱に拳拳服膺して威其徳を一にせんことを庶幾ふと陛下から御申出になつて居る我々蒼生はこの朕爾臣民と俱にと仰せられた仁徳を以て日本の精華を世界に發揚し祖宗の遺徳を對揚せなければならぬのであります。

善惡の二方面から色々論じ去り論じて來ましたが要するに諸君は勿論惡の方にも充分氣をつけて一事でもおろそかにせられぬ様吳々も希望に堪へぬ次第であります。

散る花を南無阿彌陀佛と夕哉
一僕とはくくありく花見哉
鶯の平とよなるや春の雪
梅が香に驚く梅の散る日哉
曉や嵐は雪に埋もれて

守 武
季 吟
浪 花
梶 良
土 朗

文學士 中村勝磨氏談

先輩として吾校の爲めに盡瘁せられたるあるは常に耳にすれども瀟湘たる風手に見親しく卓然と聽を得たるは今回を以て初めてなす、今反崎博士と共に來校講話あり録して後究を待つ（中野石腸生）

私は先程校長の御紹介に預りました本校第四回の卒業生であります、此の學校は私に取つては忘れんとして忘るゝ事の出来ない思出多き母校であります、此度久方振で懐しい故郷の地を踏みまして當校へも立寄ることが出来たのです。

只今姉崎博士から色々有益にして多趣味なる御講話がありましたして、最うそれで充分であるとは思つたけれども折角故郷へ歸り活氣潑刺たる諸君に見へて御挨拶をせぬのも妙でないから一言所感を述べやうと思ふのであります。

私は敢て國自慢をするのではないが、諸君は實に幸福な國に生れたたものです、この江洲の地、四方は峰巒に圍まれ中央に琵琶湖を湛へて居る、日本に湖多しと雖も世界の至る處に湖ありと雖もこんな綺麗な湖は珍らしい稀である、諸君試みに城山に攀ちて御覽、左には烟波淼々たる湖水を見る、脚下には内湖あり、八景亭があり八景亭の水は大分濁つてはあるが然し琵琶湖の水は如何にも綺麗である。

この山河相繚いたる絶景は、他處にはよけいは見あたらない、私は寧ろ無いと斷言するに躊躇しませぬ。水の綺麗な事既に如此であるのに、山には亦大に特色がある諸君等は朝夕山を見馴れて居らるゝから別に何等の感もなからうが一寸他處へ出て久し振に歸つて來るか又はよその人が初めて此の地の山に接すると其の

特色の顯著な事が瞭にわかる。

もと此の學校に居られた鹿子木孟郎氏は京都の工藝學校を出られたのだが以來大奮發心を起して斯道を研究し佛國に留學して研鑽すること多年遂に業成つて歸京目下文部省審査委員をして居られる此人が謂はるゝに「私は江洲へ行つて初めて山の美を知つた多忙の身で隙がないが間暇を得たら是非とも伊吹の靈峰を寫生したいものだ」と然り大に然り誰でも他國人が來れば皆此の様な感に打たれるのである。

日本は山國で至る處として山を見ぬ處は無い、而し乍ら多くは一重である輕舟すでに過ぐ萬疊の山と云ふ感は無い然し我江洲は中央には琵琶湖を湛へて窪み周圍は山で高い、スリハチ形である、山は決して一重では無い山は又峨々として居る、特に彦根附近は屏風を建て圍した様で伊勢の國境まで行くのには幾重の峰を越ぬ谷を渡らなければならぬ其の山が遠近につれて特種の色を呈して居る。

私は生來釣が好き、ハイ釣が好きで日曜には必らず東京から磯や出崎へ出かけて行く。

房総の山線一脈宛も海上に浮んで居る様、ちようど日が西山に没する頃には其の景色實に筆舌のよくする處ではない尙し繪心があつたら腕を振つて見たいと其都度に思ふのであります。

今江洲に歸つて見ればそれ等の景色は殆んど比較にもならぬ大小の峰巒遠く近く色を異にし形をあらためて皆綺麗を競ふて居る、この山河相繚へる景色他にはヨケイない圖である。

諸君が學校を卒業して、さて一度歸つたら必らず此の感に打たれるに違ひありません。それから諸君等は天然の賜物を受けて居らるゝ

何であるか？世界で決して日本では云はん世界第一の名聲噴々たる彦根の牛肉であります（大笑聲起る）彦根の牛肉は實に世界第一流旨いもの、これは私が主張するのではなく余所の人苟しくも彦根の肉を口にしたものは皆異口同音に旨いと云ふ、勿論これはお追従も云ふが只一樣のお追従ではないだらう。

英國の牛肉の美味なのは既に定評がある、然し十人十色英國のよりも日本の神戸肉の方が優れてゐること數等だと云ふ、これは坪内博士でも此處に居らるゝ姉崎博士でも保證せらるゝに違いない。

然るに私が或る時神戸の人に彦根肉を振舞つた、神戸の人曰く「之は肉より旨い鳥たらう」と云ふ、これは神戸牛と彦根肉の味に差が甚しいからで、之に依是を觀れば彦根肉は確かに神戸肉以上である、否日本一である、世界一である、（笑聲）諸君等は常にこの世界一の牛肉を口にするの光榮を得てからるゝ。下宿屋や寄宿舎の肉はあまりよい肉ではなからうが（滿堂哄笑）然かし東京の肉よりは確かに上等に屬する。

吾輩が或る温泉へ行つた時に御馳走の話が煮へて時ならぬ花を咲かせた、中には極端にも禁肉食論を主張する人もあつた、この時青山博士之を駁して曰く「牛肉を食へば目に見えない精力を養ふことが出来る一寸見青瓢箪の様な人に案外精力がある外見ばかりの体格検査は愚の甚しいものがある、頭の長い奴はよし頭もよくこの精力此の体力が有ればそれこそ鬼に金棒だ、薩摩甘庶や大根を食つて居つては到底覺えない」と云ふ我輩は之には双手を舉げて大賛成だが經濟上中々毎日之をシヤブル都合には行さ兼ねます（大笑）

しかし諸君はこの天然の賜物を食つて充分に精力を蓄積し体力を強ふことが出来るのであります。

古來この江洲の地は幾多の天下に大事を爲した人を出した、宗教界に道德界に政治界に圭刀界に傑傑を生んだのです井伊直弼公の事は云はすもがな、湖西小田村からは聖人中江藤樹先生、高嶋の竊齋からは勤王の志士淺見綱齋を宗教界には宗文即ち紅葉の名所永源寺の越溪を、文士俳人には竹堂許六基由を醫者としては香川とて婦人科で名高い人物を出して居る其の他あげて數ふるに遑なき有様であります。

のみならず天下の偉人で名を竹帛に垂れたものは此の地に足跡を留めない人はない、江州は須要の位置にあるから東山東海北陸あらゆる處から來るにも必らず此處を通過せねばならない、戰國時代の信長秀吉家康等も等しく一度は此地に足跡を留めたのであります。

かゝる歴史的でなごめるに由るのか一般に國民は皆伶俐である、或は今の肉の御蔭かも知れないが、この世智辛ひ競走社會になつて押しも押されもせぬ江州商人として東京は勿論京阪地方尙遠く海外にまで驥足を延し至る處として江州商人の名を噴々たらしめたのは確かに偉とすべきである。

之物に忍耐であり事に勤勉であつたのに憑るのであります只今の江州人は頭を解剖して是れは先人の遺したこの美點も勿論具有して居るが亦他に獨特の缺點がある、それは四通發達した土地から故かあまりに利巧過ぎ目前の利益にのみ汲々して漁夫の利をせしめ様とする點である。

我輩の三年生の時、四五年生がストライキをやつた革命軍を起した幾月かの間無益の時日を費して漸く沙汰止みになつたが我輩が此學校を卒業して京都の高等中學入學試験に應じた時に岡山中學の生徒等は優等の廉で一年先に入學を許可せられた、之れは前のストライキの甚だ難有からぬ御蔭であつて目前の利害にのみ氣を取られ將來を遠觀し得なかつたので江州人根性を證するに餘りあるのであります。

實を申せば此學校の學力程度は他の學校に比較して多少遜色あるを免かれぬ故に天下の學生が雲の如く集つて來る高等學校の入學試験等には優勝劣敗の結果人後に陥らるの止むなきに至るのである。

昨日は校庭で運動會を見せてもらひ諸君の壯烈なる意氣に衷心喜びを禁じ得なかつた、あの時誰も負け様と思つて一生懸命走る人はあるまい吾こそは當日の月桂冠をと各勝つのが目的である。

人間はギャツと生るれば立派な社會の一員となるのである、初めは家族の一員次ぎは同郷、學校一郡一國と云ふ風に生長つに従ひ廣く大なる社會の競争場裡に立つて角逐せなければならぬ。

學校教育であつても同一理で五年級の人五年、一年級の人一年級で各鏑を削つて戦ふ、此れは決して後れを取る爲ではない大に勝たんが爲めに急るのである、今全國學校成績統計表を見るまでも無く遺憾ながら諸君等は敗者の位置に居らるゝ、然し之は決して諸君が勉強を懈つたが爲めに學校の競争場裡にひけを取つたと云ふのでは無い。

幕末から維新に掛けては直駒朝臣一日に追吊會のあつた宇津木、長野の様な通れ名士を犠牲に拂つた事は枚擧に遑も無い位であるが外國からは壓迫する内では攘夷討論が炎々と火の手を擧げて居る此の難局を切り抜けて明治の聖世を産み出したのは上下公武が一致結合したからである。彼の西郷隆盛勝安房の兩雄が會談して江戸城を致し王政が復古したのも皆國民が其の非を見て改めたからである、天下の輿論が一致したからである、實を申せば幕府の勢力は微々振はなかつたとは云へ、練兵法等は諸藩よりもたしかに文明式であつた諸藩が一騎打で得物を抜ひててゝ居る間に早くも幕府では散兵を應用して居つた海軍等も薩長の

連合艦隊よりも遙に優勢であつたししかしこの小競合が長引いたならば丁度今度の支那革命の様に御しまひには列強から彼是干渉を受けて努力に對する報酬と云ふ手段に來るのであつたが上下公武其の非を悟つて一致したので其の難は免れた。

かの日露の役前にクロハトキン將軍が日本視察に來た時に、我議會開會中で政黨が互に我を張り政見もまらゝの有様だつたから將軍之を見て、ホクン笑み好機逸すべからずとなし日露戦争の火蓋を切たが豈計らんや、算盤は大間違ひ今まで揺動した政黨も一致し國民も團結し戦へば必らず勝たざるなき有様であつた。

支那と吾國との違ふ處はこの外國の侮を受けたならば兄弟鬩ぐとも直に握手して協力し合ふ處にある。

これを小さく應用して諸君等の前へ持つて來る、諸君等は定めし胸中種々面白からぬ事も有らう不平が有らう不平此の不平は大になければならぬ不平は活力の度に正比例するので活力が溢るゝばかりなれば不平も亦満々である、彥根の牛肉を食へば勃然たる不平は伸じ得ないであらう(笑聲起る)

而しながら學校と云ふ社會で競争して成績の良好を計らんが爲めには決して此の不平を漏らしてはいかぬ。

支那の革命軍になつてはいかぬ諸君等は一致團結し歩調を合せて進んで行かねば全く駄目である。

景色は日本一世界にも稀なる處牛肉は亦世界冠絶し環球至る處其の比を見ず、昔から名高い人物を輩出してゐる此の江州の地に學ばれつゝある幸福なる諸君。

冀くば奮勵努力せられて日本一の名聲を博してゐる此の學校の名譽を眞の日本一世界の模範校となる様模範生とならるゝ様希望にたへぬのであります。



○ 偶 感

第四年學級 中 山 貞 武

無邪氣なれ。勿論邪氣既ちヨコシマな心のない事であります、私共は無邪氣と申すと、直ぐに天真爛漫たる小兒を聯想させよう、之は現代の日本人には、小兒を除く外、邪氣のある事を意味して居りませう。由來日本人には、早くから成人を氣取り辭儀を銜ふの風があります。斯様な障害物があつて、どうして意を一點に集中する事が出来ませうか？

夫子は、巧言令色、鮮矣仁。と云はれたではありませんか！親の脛を噛つて居る今日、學生の對面を汚さん限りは何でも宜しい。妄に華美を裝ふのは今日學生の爲すべき事ではありません、宜しく此浮華の世に質撲の種を蒔き給へ。

剛毅朴訥近仁。ではありませんか。

自發的なれ。喜怒哀樂は、他に誘導する原因はあるにせよ、先づ自ら發するものであります。それだから極端なる結果は、實に恐ろしいもので、人間最後の罪惡とも云ふべき、自殺すら恐れませぬ。

斯くの如く自發的の事は恐ろしいものであります、小野道風の蛙も、自發なればこそ、困難を冒し忍耐に忍耐を重ねて、遂に目的地に達したのであるし、又飛んで火に入る夏の虫も、同じであります。之を教唆又は強ひられてしたとしたならば如何でありませう。必ずや中途で挫折した事は火を見るよりも明でせう。

人間は困難に遭遇して、經驗を積む程、發達するものであります。見給へ！知名の人士を！（たまには、蔓に、ぶらさがる。瓢箪もあるかも知れんが）

「若い時の苦勞は、買つてでもなせ」です。買つて爲さずとも私共は、十二分苦心すべき事は有ります。人間は、よく、姑息主義を希ふものですから、よく／＼其邊は注意しなくてはなりません。

自發した事をなす時は、忍耐もする、節儉も出来る、獨立もする。而も之亦、自發したのであるから、其勢力の猛烈な事は強ひられて爲したのとは、同日の談ではない。私は吳々も自發的な事を希望して止まないのであります。

元氣旺盛なれ。諸君が、潤んだ朝顔を見た時はどんな氣持がする。必ず良い氣持はすまい、シミツタレタモノだ、と、こぼすに違ひない。然るに同じ朝顔でも、未明に起きて、之に接して見給へ。其快何んぞ、筆紙に盡すを得べきやだ。動かない植物ですら此通りです。まして人間に活氣がないはず、見られぬものはありません。西記前に偉を振ふたスパルタは、男女老若悉く、元氣旺盛な國であつた。又近時諸強の靴先に飛ばされて居る、支那は、其昔どうでありましたか。

我國の元氣と、意氣は、正に銷沈せんとして居ります。此時に當つて先づ、其手練を表はすのは、中學生を
 かいて他に何處にありませうか、全國數百の中學の健兒が勢銳い鉄先を以て、弱徒薙り而も萎靡しかけた、
 土地を耕したならば、どうなるだらうか、國家の元氣は何人のものだらう。老人でもない。壯者でもない。勿
 論小兒でもない。やがて中堅の國民となる私等のものであります。

國家の興亡は、國民の元氣如何に依て、左右せらるゝものであります。諸君！地球を狭しと爲せ。萬書を足
 らすとせ。然も、私は、朝顔的元氣を欲するのでなくして、松柏的元氣を望むのであります。

以上書きました處は、甚だ愚論。論は愚拙でありますけれども、其必要は申すまでも無い事だろと考へます
 。若し同感の士あつて、浮薄なる人情に染まらずして、反つて、之を改革し前途に横はる、學を修め徳を積み
 以て偉大なる人格を作ると共に、益々校風を發揮せられん事を、切望して止まないであります。(了)

ふる雪の白髪まで大君に

仕へまつれば尊くもあるか

橘 諸兄

春來てぞ人も訪ひける山里は

花こそ宿のあるじなりけれ

藤原公任

みしま江に角ぐみ渡る蘆の根の

一夜の程に春めきにけり

曾根好忠

○滅 亡

第三年級 熊 谷 讓

滅亡！自分は此の聲を聞く毎に轉た斷腸の念を禁じないのである。

あはれ國は亡んで山河残り、古墳は累々として恨みは長へに消えず、愁風落寞たる荒涼の地ならんには誰
 か滂沱たる落涙に、兩袖を潤さる人はあらうか。

いにし清の太祖、愛親覺羅努爾哈赤が社稷の長計を定めしより以來、茲に年を關する事僅か二百六十餘年、
 又もや革命の大騒亂を醸し、千代に八千代に、さされ石の苔のむすまでと誓ひしは、あはれ邯鄲枕頭一炊の
 夢、遂に運命は極まつた。

噫々之れ一大不祥酸鼻の極みではないか！

環球上最古の國家として謳歌せられた一大老國は、移推變遷に遠かない。聖天子堯舜の領域は、悲惨なる修
 羅の巷と化した。

然れども國家滅亡は、單に政家のみの罪ではない、又軍隊の強弱如何にのみよるものではない。
 國民にして眞率敬虔の念慮なく、放縱懶惰因循姑息に傾き、浮華虚飾に流れて、眞理を採求するを怠り、偽
 善を以て事を處し虚偽を語り詐欺に耽り、不撓不屈及び共同團結の念なく、不和雷同にして秩序なく、あた
 ら強者は専横して弱者をしいたげ、弱者號哭の慘狀を呈せんには、滅亡の悲運は云はずもがな。
 之れ歴史の傳ふる處である。

さわれ、諸子請ふ願はくば徒に他國が演じつゝある悲劇を見て、他人視する勿れ。

各自が前途に眼を放ち、一翹の同情と共に己が永遠の計をせねばならん。

滅亡するもの、たゞに他國のみに非ず、滅亡の語獨り國家のみの謂に非ず、有情非常もろとも然り。實に滅亡の惡魔は其處此處に散在し、潜伏して、我等の隙に乗せんと窺ひつゝあるのである。宜しく丹田の臍を堅めよ。

誠に炯々たる活眼を開いて回顧一番せよ。

掛けまくも、あやに畏きすめら御國の基礎を建て給ひし、神武の帝以來、皇統は連綿として絶ゆる事なく、君の御稜威は外つ國までも輝き渡り、歐米の大強國と比肩して、讓ることなき盛大を致せしも、惜むべし學術、文藝、公德其他有形無形の文明において、劣る處は多大ではないか。往時君子國と稱讚せられし我が大和民族は、今や敗風汚俗の急潮に翻弄されて、五倫五常の道も衰頹し惡風の渦中に捲き込まれて、隱謀、破倫、陷穿、邪惡、其他罪惡滔々として行はれ、便佞善柔便辟の假面を冠れり、斯かゝ現時の有様にして如何でか、金歐無缺の團体を永遠に保持して、發展する事が出来るか、實に我國祖宗に對して如何に答へ奉るべきぞ。佛人リギョール氏は「我は日本の美を慕うて來れり、君子國の美風愛國の精神、及び大和魂、實に讚美の外なし」と云つた。又マールウナー氏は我日本國の特質を論じて「日本國民は体面によりて動く、体面は日本國民の行爲を定むる唯一の定義なり」といつて激賞した、マルコボロ氏は日本は金銀を以て充され國民隆盛なり」と東洋見聞録に書して歐州に紹介した。昔時碧眼に映じたる、我國民は斯の如くであつた。噫今

は……醒めよ諸子、桃源の夢は去つて世界の場裡は貧狼虎噬である。往時の美風はまさに消ゆんとして居る。之れ自ら滅亡の途を辿り、滅亡の岐に彷徨し、自己の手によりて、自己を亡さむとして居るに等しいのではあるまいか。眠を醒ませよ、諸子。ただ小時の快を食るに汲々たる勿れ。小利小功に齷齪して、國家永遠の大事宏圖を遺却し、蠢々乎として徒に槽檻の内に朽つる勿れ。活動の源泉奮闘の場裡其處に存して居る。

されば我等國民たるもの、宜しく現時の趨勢に鑑み正義を旗幟して正々堂々仰いで天に恥じず、伏して地に恥ぢず、敗頹せる惡弊を改善し往時の美風を克復し、益々倍數倍の發展をなし荒怠相誡しめて自強息まざる底の心掛こそ必要の第一義である。嗚呼清朝は遂に亡んだ。眠れる獅子は身中の虫に殺された。永久の恨を呑んで國は變つた。大聖孔子の教へは果して何處にか存す？舜の民はいづこにかある。さわれその變遷は我等の一大反省を促しめた天下の配劑ではあるまいか？咄

醒めよ！決して彼等が轍を踏む勿れ。いにし大聖大賢續出した、彼れらは如何にして祖宗に答ふべきか、彼等が罪は深い、その罪は永劫に滅しない。嗚呼滅亡！實に悲惨なる哉、果敢ない哉。(了)





○芳野紀行

第四年級 脇坂越溪

芳野といへば誰とても、南朝の夢を想像せぬものぞなき。嶋なるものは海洋中に孤絶し、大陸より隔離するをもて危急の際には人類の隠れ場所ともなり、將天天然の大砲臺ともなる、されば日本歴史に於ても、固有の土人が本州に劣敗するや蝦夷嶋にのみ遺存せし古代より、近きは幕末榎本武揚等が、軍艦を率ひて蝦夷に投じたる實蹟あり。支那にても、鄭成功が臺灣島に明の皇族を奉じ、西洋史に於ても齋しく見受らるる所數々ありて、枚擧するに遑わらず、而して此等劣敗者は古今の歴史に、概して正しく道を守りたると、四圍の不正當なる壓迫の爲に、島にまで驅り入れられたるものなり、然るに山岳なるものは、平原地方より孤絶し一般社會より隔離し、超然として區域を作るものなれば、其關係に於ては、全く大陸に對する島と異なるなし。然れば大海人皇子が難を此山中に避け給ひたる古代より、吉野山峰の白雪踏わけて、入りにし義經が實蹟、中井竹山の「天子蒙塵渡大瀛親王敵愾蘇孤城」と詠じけん如く、天子蒙塵して大海を渡りて、隱岐に遷

幸の間、護良親王が敵愾の義憤に堪へず、慨然藏王堂の孤城に據り給ひたる實蹟を經、南朝の天子が此の山中に行在し給ひ、五十余年間吉野朝廷と稱へたるは、平原地方は全く優權者のために占領されしより、この山を最後の避難處となし給ひし所以なり、頼山陽が「壘々春山別有天、花開花落鎮依然、羊腸險惡君休怒、晉護南朝五十年」と咏するもの、流石に史識高しとやいはむ。

芳野の地たるや、畿内の平原に最も近き深山にして、其背後は愈々高く、愈々深くして、紀伊山系及び和泉山塊蟠屈するの間、前面に楠氏の一族控へ、背後には北畠氏が強大なる掩護物となり、地の利を得たるが故に、大なる支持力を保維し、以て五十年間の帝業の興りしなり、されば此のあたり帝王忠臣の遺跡多く、此間に散在し、此等の遺跡が櫻花の間に隱見すればこそ、限りなき趣を吉野に添へ、芳野と云へば直に一種の情懷を動かし彼の嵐山、隅田川などは、全く特殊なる感興を與ふるものなり。

吉野大宮

とも吉野の大宮は、南朝最初の帝、後醍醐天皇を祭り奉る官幣大社ぞかし、側に鎮座まします攝社こそは、皇大君の御爲に吉野の山の夕風に散る花と共に消えにし資朝、俊墓を初めとし、南朝の忠臣數多祭れるなり社内櫻樹多く塵もたゞざる清淨の地、西吹く風の音鳥の音もそるる亂世のことども偲ばせて、感慨無量心寸斷し、腸九回し思はず泪下るを覺むたり。

村上義光の墓

吉野大宮より南に通ずる人車道美しく、路傍櫻樹多く植ゑなされ、その景や實に芳野の名に恥ぢず、天公一

篇の地たるを失はず、此の景色にして我里近くありせば、通はぬ日はなくて、斯のうるはしき花の木の下にて思ひを深くせんものを。

道廣けれども人の通りは繁からず、五十有餘の行客、悠々漫歩しつゝ、錦の中行けば、右に小高き丘あり、老松の間、墳碑のものさびて見ゆれば、あれも定めし名ある忠臣の墳ならめと馳せ行けば、之なん村上彦四郎義光が墳なりけり。

吉野川の流れ滔々去つて歸らず、世も之も共に變りぬれど、英雄の名は、年々に咲きては散る山櫻と、芳芬を傳へて未代までも薫るなる。

芭蕉發句碑

追分の辻に芭蕉翁の發句碑あり、苔むして字定かならねど

花さかり山は日頃の朝ばらけ

大橋又一ッ橋と云ふ

追分より少許り南にあり、此わたり所謂一目千本なり、此處の路傍腰を下して見渡せば、兩側に植ゑられたる櫻、楓、入り交つて、薄く濃く紅く黄に色付ける木々の間より、かなたの橋見ゆつ隠れつ、行きかう人も畫の中と見ゆるに、かれよりこれを見るもいかゞあらむ。

一目千本

いつはあれど、いつくはあれど名々はしき、吉野の櫻は此山の、しらす神の御木とて、古より樵ることを戒めあるが上にも、多く植生したれば、實にやこれが春なりせば、峰も麓も處として花ならぬはなく、これはくゞとばかり花の芳野ともいはずなん。今は秋なり、春ならぬと氣澄み渡りて、一入花の思ひの深さに、今や櫻木の葉は色付き初めて三月の花よりも紅に、風吹かぬに、春の花のそれのこと、ひらく落ちて袖に入る風情は、あはれとや云はめ、他の言葉に云ふを得ざるなり。

みよし野の道もせに散る錦かな

我行く道は坂の上、首うちらべて見れば上市より上る道、布引きたらんやうましろにて、葉を散して骨ばかりなる木の梢の間より、見ゆつかくれつ一うねり、下り行く坂の落葉の中に盡くる景色、言に出でんはなかくなり。

みよしの、春の花わけ秋までも

色はやつさじ見ん人の爲め

隠松

大橋を越ゆる處路傍に樹てる一つ松、之ぞ世にいふ隠松、谷より見上れば、花の爲に見ること能はねば、かくは名づけしと實にと思へどいかゞあらん。

盛なる花に隠れて名をしるく

立るやいづこ三吉野の松

(大納言雅章)

吉野まぢ

吉野の惣門なる黒門を入れれば、人家一條に立續て、南に延び、末は疎らに西に曲りて十余町、此町休裁を書ける菅笠日記の筆の跡、いと面白ければ、茲に轉寫しつ

此里は、上の水分の嶺より、片下りに續きて、細き尾上になん有らざれば、左右に立並たる、民の家居ども、前よりこそさりげなく、たゞ世の常の屋の様に見入れらるれ、後は皆谷より作り上げて、三階の屋になん有ければ、何の家も見わたしの景色よし、さるは客人やとせし、又物賣などするは、上の屋にて道より直に入る所なり、次に家人の住居は、中の屋にて其下なれば、戸口より階を降りてなん入る、今一階を下りて又下なる屋は、床などもなくたゞ土の上に物打置など、みだりがはしく、むつかしきに、湯あひる所、廁など其處にしもあなれば、日ひとひ歩き困じたる旅人の足は八重山越ゆくことらして此階ども昇り降るなん、いと苦しかりける、されど所の様のいひしらす面白きには、さること物の數ならず、花散りなばと、まつらん人も打ち忘れて、やがて止まりても住みなばやとさへぞ思はる。

こは明和頃はひの儀なり、今は様更りて美しうぞ見ゆけり、このまちにて款賣る柚人の女の様のかはりたるを見て、いぶかしうぞ思ひまつれり、實に吉野は事かはりたる事のおほきよ。

藏 王 堂

門内町余。金峯山寺の本堂なり、宗旨天臺真言の二派に屬し、上古は百の僧院覺をつらねし巨刹なるも、中古兵亂のために烏有に歸し、今はたゞ本堂のみ巍然たるを見るのみ、堂に躑躅の柱あり、周八尺余、いと珍らしく見ゆたり、此の寺は吉野の里近う立ちたるものなれば、固より幽邃仙界に入るの趣はあらねど、伽藍の高う聳ゆること、山門の古きとは、恍として今昔の感あらしめ、身は千年の昔に在る心地す。

吉野城の舊跡

藏王堂の廣前に、斷礎のみ残る所に四本櫻あり、大塔宮護良親王が最後の御酒宴を開き給ひし所ぞと、また此あたりなる櫻門は、そのかみ村上義光が大塔宮を落させまつらん爲割腹致せし所とかや、妻木撫る童も、魚釣る海人の子も、彼が花々しきを知らぬものどてはなからめど、なき古き知識を温めれば、其折の戦況は斯くなむ。

元弘の昔大塔宮はこの吉野山にてのどけき春を迎へさせ給ひ、こゝにて咲きにははむ花を見をなはさむにはまたしもならむ、さるを東風吹くかせいよゝ寒くなりぬるに、この山にもこのどかにすませ給ふことかたく高野のおくにかれ給ひしは、いかにうたてき御事どもならむ、元弘三年は正月十六日のことなりけり、二階堂貞藤六萬余騎にて吉野城へとせまりきたりぬ、兩陣互に矢合して入かり立かはり攻め戦ふこと七日、敵遂に金峯山寺に火を放ちて、二方より夾み打ければ、城兵防がんとすれども防ぎ得ず、或は腹切りて死ぬるもあり或は火に走りて死ぬるもあり、或は敵にひさくみて刺ちがへて死ぬるもあり、そのさまはいさましとやいはむ、あはれとやいはむ、親王も今はのがるゝところなしとおぼして、御心さはめて敵の中へ切入給ふ劣らぬ兵二十餘人従ひ、群る敵に切入右を拂ひ左を薙ぎ、黒烟を立て、切まはらせ給ふに、寄手の兵纒の小勢に切立てられ、木葉の風に散るが如く、四方の谷へ颯と引退くを御覽ありて、ふたゝび藏王堂に入らせ給